

EUPHONIUM

ワンポイント・アドバイス

I 行進曲「煌めきの朝」

作曲：牧野圭吾

トランペットのスピード感に合わせて、共に金管セクションをリードするつもりで、アクセントの音が輝くように吹きましょう。25小節目は、バスーン、テナーサクソと一緒に、スッとバンドのサウンドの中に入ってゆき、メロディに奥行きを持たせるようにクレッシェンドしていきましょう。

【B】からのオブリガートは、低音域のホルンも加わります。ユーフォニウムが朗々とリードするつもりで。【C】の4小節前の低いDが潜らないよう、音の実体を際立たせて演奏しましょう。

【C】からの第二マーチではトロンボーンサウンドを中心に、ユーフォニウムが音量や響きをサポートするつもりで吹いてください。

【D】の3小節目に休符がありますが、その前のC#からフレーズが継続してるつもりで、音に方向性を持たせて演奏しましょう。上のFの音程が上擦らないよう、日頃からリップスラーなどの基礎練習で訓練しましょう。

【E】からの再現部は、【B】と比べて音量が強くなったというより、音がより豊かになったつもりで演奏してみましょう。

【F】はオープニングとサウンド感のコンセプトは同じですが、調性の違いを感じてみてください。上のE♭の連続の部分は非常に音程が上擦りやすいので、トランペットの1番に集合するつもりで演奏しましょう。

【H】からのオブリガートは、アーティキュレーションに注意しましょう。レガートスラーで滑らかに繋がりを意識して、スタッカートは短く切るというよりは軽やかに弾ませるイメージで演奏できると良いです。メロディの歌い方と統一感も持たせたいですね。

【K】も【C】同様にトロンボーンを中心に演奏しましょう。

【L】の3小節前アウフタクトの立ち上がりは、ボヤけないように存在感を出しましょう。【L】からは【C】や【K】と同じコンセプトで演奏しますが、フレーズの最初の音や低い音の発音が明瞭になるよう、音のスピード感などに注意してください。最後の4小節は冒頭と同じく、トランペットとバンドをリードするつもりで、華やかに演奏して締め括りましょう。

EUPHONIUM

ワンポイント・アドバイス

Ⅱ ポロネーズとアリア ~吹奏楽のために~

作曲：宮下 秀樹

ホルンのサウンドを豊かにサポートするつもりで、また1拍目と3拍目のDのスピード感がボケないように演奏しましょう。3小節目アウフタクトからのフレーズは2拍目のE \flat 、さらにはその先のB \flat に向かって、音が痩せていかにないようにしましょう。

【A】からのメロディでは、長い音(9小節目の2拍目や10小節目の1拍目裏など)に重さをかけ、際立たせるつもりでフレージングをしてみてください。また、一緒に演奏するホルンにとっては、低音域のメロディなのでサウンドのブレンドについては話し合ってみましょう。13小節のアウフタクトからはメロディの仲間が木管楽器群に切り替わるので、サウンド感の変化も感じられると良いです。またフレーズを途切れさせないように、ブレスの位置も工夫が必要です。15小節目の付点のリズムは跳ねすぎないように、十六分音符にテヌートがついているようなつもりで演奏すると良いかもしれません。

【B】アウフタクトの低いDを豊かに鳴らしてフレーズを始めましょう。装飾音符を前に出すのか、拍の頭にするのかバンドで統一しましょう。

【C】の2小節前は、どちらも2拍目に重さをかけて吹いてみてください。【C】5小節目アウフタクトからのフレーズは、トランペットとスピード感を合わせつつ、木管群をリードするつもりで堂々と出ていきましょう。32小節目の三連符は、2個目の低い音がハッキリ鳴るように意識して。fpのfは八分音符分鳴らした後、裏の三連符に譲り、最後のクレシェンドは空間に向かって放つように処理して、次の低いGのアクセントの準備をしましょう。

【D】からの二分音符は抜き過ぎず、音価に注意してトロンボーン、チューバとアンサンブルしてください。37小節目のデクレッシェンドは低いFの切れ味を見せてから、2拍目裏からかけ始めるぐらいのつもりで良いでしょう。38小節目からはカスタネットやスネアのような、打楽器的な軽やかさで演奏し、フレーズ最後の二分音符に向かっていきましょう。“Ta-Ta-Ka”とトリプルタンギングに挑戦できそうなら、ぜひ取り組んでみましょう。

【E】の1小節前は、テンポを引っ張ることなく、クレシェンドを利用してしっかり音に重さを持たせ、【E】からも重みのある音を保ちつつ推進力を持って演奏しましょう。

【F】のfとアクセントの付いた八分音符が際立つよう、それ以外の音と音量の差を大きさに付けてみましょう。Soloの最初の音は、バンド全体に対して1人でmpなので、音量を控えようと気にし過ぎず、たっぷりと美しい音で始めましょう。F \sharp に重さがかかるようなフレージングも良いかもしれません。soloは2小節ですが、フレーズとしては4小節で大きくまとめるつもりで、GからB \flat への繋がりは、調性の色の移ろい、soloからTuttiサウンドへの移ろいを楽しんでください。79小節からのDのロングトーンでブレスが保たない場合は、他のパートとの兼ね合いを考えて、息継ぎを工夫しても良いでしょう。

【J】からの再現部は【A】とは違い、トロンボーンとのペアリングを意識したサウンド感を考えてみてください。

【K】の2小節目以降からのアーティキュレーションは、前半との違いをしっかりと表現しましょう。全体を通して、ポロネーズやアリアのスタイルを意識したアプローチで取り組んでください。

EUPHONIUM

ワンポイント・アドバイス

Ⅲ レトロ

作曲：天野正道

冒頭から【E】まで、トロンボーン1st、2ndとのセクションワークとなるので、ニュアンス、ハーモニーを統一しましょう(4小節目は金管で唯一木管群と同じメロディなので、しっかり主張しましょう)。

【E】からのバラードは、ベースセクションとして付点のリズムなどを跳ねずに音価を正しく、スクエアに演奏してください。

【G】からはトロンボーンと組むところ、ベースと組むところ、木管群と組むところが混在しています。組む相手によって、カメレオンのように雰囲気を合わせられると良いですね。

ベースの時は長過ぎず短過ぎず、グルーブ感が出せる音のスタイルを研究してみてください。

メロディやバックングの際は、長い音を抜かないようにしましょう。

ロックや、バラード、クロスオーバーの雰囲気やスタイルを持っている曲を探して、たくさん聴いて研究、真似をしてみてください。

Ⅳ マーチ「ペガサスの夢」

作曲：水口透

冒頭は、ヘミオラに支配されているので、バンド全体でビート感が統一できるように練習してみてください。

【A】からオブリガートが始まりますが、2拍目からフレーズが始まることが多いです。噛み合わせの面白さを出す為に、はっきりした立ち上がりを心がけましょう。

【B】からはトロンボーンと、32小節目からはトランペット、木管群とフレージングを揃えましょう。

【C】の八分音符は軽く、付点四分音符は重く、吹き分けてみてください。

【D】の十六分音符の軽やかさがトランペットと揃えられるよう、練習しましょう。

【E】はpですが、クラリネットパートと対等になるバランスを研究してください。77小節目の低いB \flat に重さがくるフレージングなど、大きなまとまりで音の方向性を組み立てられると良いでしょう。82小節目のCの音に、前半のマーチの2拍目と同じような輝きも足して演奏してみてください。

【G】のアウトタクトからのメロディは、トランペットと共にバンドをリードするつもりで吹きましょう。

【H】の7小節目のF \sharp が第3音としてはまるよう、トロンボーンと練習してください。

【I】の3小節目のC \sharp 、4小節目のB \flat が潜ってしまわないよう心がけましょう。このパターンのフレーズが続くので、同じように注意してみてください。

【J】のオブリガートはユーフォニアムとテナーサクソしかないなので、明瞭に演奏しましょう。

エンディングにかけて、短い音は軽く、長い音は重く扱ってください。